

平成 30 年 6 月 7 日現在

機関番号：14401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2017

課題番号：16K17422

研究課題名(和文) 小学校への移行期における学力獲得プロセスの解明

研究課題名(英文) The Study of Social Processes to Acquire Academic Skills in the Transition from Pre-School to Elementary School/honk

研究代表者

前馬 優策 (Maeba, Yusaku)

大阪大学・人間科学研究科・講師

研究者番号：00632738

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、就学前教育機関から小学1年生の入学後(小学校移行期)において、どのように小学校に適応し、どのように「学力」を獲得していくかを明らかにした。幼稚園の最終年から小学1年にかけて普通の学校での様子や、発達状況や学力状況を示したデータを収集した。小学校での学習についていき学力を獲得するためには、学習・生活のリズムに乗ること、自信を持つこと、補習の機会があることの重要性が明らかになった。

研究成果の概要(英文)：This research aimed to reveal how to adapt to elementary school and how to acquire "academic skills" in first grader (in the transition from pre-school to elementary school). From the last year of kindergarten to the first year of elementary school, the data has been collected by participant observation, developmental test in kindergarten and achievement test in primary school. For learning at elementary school and in order to gain academic skills, it became clear that the importance of getting into the swing of the school life rhythm, being confident, and having opportunities for supplementary tuition.

研究分野：教育社会学

キーワード：学力 小1プロブレム 幼小接続 学校適応

1. 研究開始当初の背景

2000年代に入り、日本における学力問題は、実証的な量的データを用いた研究・議論が展開されるようになってきた。その中で、子どもたちの学力は様々な要因によって影響を受けるが、経済的・文化的・社会関係的なものに代表される家庭の要因の大きさが明らかにされている(苅谷・志水 2004, 耳塚 2007 など)。これらは「学力格差問題」として注目を浴び、同時に、その格差をいかにして縮小するかというテーマの意義がますます大きくなっている。こうしたテーマの下で行われる研究は、「効果のある学校 (Effective School)」研究に代表されるように、その多くが「学校」を対象としたものである。

しかしながら、いくつかの研究(ex. Hamano 2010) が示してきたように、子どもの学力格差は小学校に入学してから形成されていくものではなく、就学以前から存在しているものと考えべきものである。筆者は、小学校入学直後の1年生を対象とした研究において、学力格差に結びつきうる様々な格差が存在することを明らかにしてきた。たとえば、言語運用の面で、保護者の職業がホワイトカラーである場合、主語の使用が飛躍的に増加したり、作文の文字数が統計的に有意に多くなったりすることを示してきた。これらの研究から導出されたのは、学力格差問題を考えるにあたって、就学前の段階で子どもたちの実態を把握することが非常に重要であるということであった。

現在、就学前の教育の重要性が、世界的に注目を集めている(ヘックマン 2015)。そこでの主張は、教育的介入を行うのに最も効果的であるのは、就学前段階であるというものである。しかし、日本では就学前教育が義務化されておらず、その内実は多種多様であり、その教育効果についてわかっていることは皆無であると言ってよい。学力格差問題への関心と関連させるならば、多種多様な就学前教育のなかで、どのような教育が学力格差は正に効果的であるかを検討することが大きな課題となるだろう。

ただし、現段階では、そのような研究を行うための研究基盤や調査を受け入れる土壌がない。

そこで本研究では、少数事例の追跡調査を行うことを通じて、就学前後の子どもの実態を把握しつつ、子どもたちがいかに「学力」を獲得していくかを明らかにすることを試みた。これまで、就学前段階から小学校への移行に当たって、小学校の教室で生じていることに注目する研究はあるにせよ、移行前後の子どもたちの意識や経験を縦断的に捉えようとする研究は存在しなかった。その意味で本研究は、学力格差研究の重要性和就学前教育研究の重要性が交差するフィールドに位置づくものであると捉えることができる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、就学前に幼稚園で過ごした子どもを小学校入学後まで追跡し、学力の状況や生活状況を包括的に把握することである。もう少し具体的に述べると、就学前教育段階から小学校への移行の際に生じる問題点を明らかにするとともに、就学して学習上の「カベ」(たとえば、文字の習得の遅れや生活上の課題)にぶつかった時、それを乗り越えるためにどんな資源が有効であるかを明らかにすることを目的としている。

3. 研究の方法

本研究は、小学校入学を挟む前後1年間(計2年間)にわたり、特定の子どもを追跡し、小学1年生を終える段階において、どの程度の学力を獲得しているかを明らかにするものである。そして、学力獲得のプロセスにおいて、就学前教育における経験や教師や友人との関係がどのように「資源化」されているかということも合わせて検討する。

対象となる子どもは、B市立A幼稚園に通う子どもである。A幼稚園は、毎年2回の発達検査(津守式乳幼児精神発達診断検査)を行っており、それを用いて、幼稚園時代の子どもの発達状況を把握した。

また、幼稚園における参与観察を実施し、普段の子どもの様子を記録に取った。

その後、A幼稚園からは、A小学校に10名が進学した。筆者は、A小学校で参与観察を実施し、A幼稚園から進学した10名を中心に、学校での普段の様子を記録したり、学力テストや作文として書かれたものの収集に努めた。

さらに、幼稚園、小学校の双方において、担任する教師から対象となる子どもの見取りについて、インタビューを実施した。

4. 研究成果

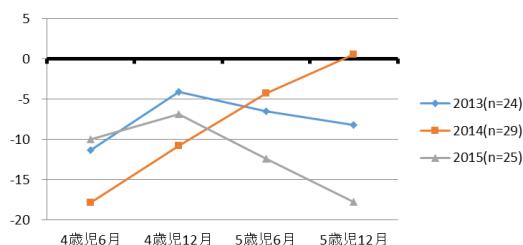
(1) 幼稚園時代の発達状況

1年目は、A幼稚園をフィールドとして、年2回の津守式乳幼児精神発達診断検査(津守式)および参与観察を実施した。津守式の結果によると、対象となった園児(31名)は、「運動」「探索」「言語」の領域で伸び悩み一方、「社会」「習慣」の領域では順調に発達が進んでいた。ただ、「探索」については発達月齢が実月齢を大きく下回り、過去数年と比較しても特に課題が大きく残る結果であった。

担任の教師は、「競技的な遊びが多く、『ごっこ遊び』が少なかったこと」を一因としてあげるが、「打たれ弱い」「挑戦していく意欲的な子が少ない」という園児の特徴は大きく変わることはなかった。

また、参与観察からは、幼稚園の生活リズムに対して、スムーズに乗れている園児とそうでない園児が固定化していることが明らか

【探索】発達差の平均の推移
(進級組のみ)



かになるとともに、その「乗れていない状態」によって、活動にフルに参加できていない状況を見出した。ただし、これが即時的に深刻な問題を引き起こすわけではなく、全体としては一つの活動に統合されているように見えた。こうした環境で過ごした園児が、小学校入学後にどのように過ごすのかを明らかにするのが次年度の課題として残された。

(2) 小学校での様子

2年目は、公立小学校の1年生のクラスを対象に週1回のフィールドワークを実施した。

入学当初の1年生にとっては、学校の生活リズムにスムーズに乗れるかどうかが重要である。幼稚園時は活動のスタートが「グレー」に始まることも多かったが、小学校では時間がきっちり区切られることが多い。

追跡対象児の中には、家庭の事情で遅刻がちな児童もいた。結果的に毎朝行われるモジュール学習に取り組むことはほとんどできていなかった。そのことで対人の学習活動に参加できないこともあり、学習機会を失うことが多かった。

また、幼稚園時に不登園だった児童は、集団に向けられた指示をすぐには理解できないことが多々見られた。時間をかければ追いつくことはできるが、その間に他の児童はどんどん先に進んでいた。ただし、時期を追うごとにそうした学習上の遅れは解消されていった。

また、学校生活のリズムに乗るためには、持ち物がそろっているかも重要であった。持ち物がそろっていない場合、学習に取り組むこと自体が遅れるし、そもそも「借りに行く」こと自体への心理的ハードルが高かった。

このように、学校生活のリズム、学習のリズムに乗れるかどうか、学習の中で学力を獲得していく上では重要であると考えることができる。

ただ、生じた学習上の「遅れ」は、放課後や休み時間の補充学習によって、量的にも質的にもリカバリーがなされていた。そのためには、教員が宿題などで児童の実態を把握し、適切にフォローできるかどうかが重要であった。

また、学級活動としての「学習」を考える際には、人間関係が与える影響も見過せない。たとえば、引っ込み思案だった児童が、

周囲と話をするようになり、学習に意欲的になっていった様子は典型的である。

さらに、学習に「遅れ」がちな児童は、自信を得る機会が極端に少なくなる。その意味で、特に小学校移行期には自信を持つことが学習の姿勢にも大きく影響を与えうるだろう。

その意味で、小学校の生活・学習リズムへのスムーズな移行こそが、学力獲得の基礎になっていくと推察することができた。

<引用文献>

- ・ 苅谷剛彦・志水宏吉編, 2004, 『学力の社会学 調査が示す学力の変化と学習の課題』岩波書店.
- ・ 耳塚寛明, 2007, 「小学校学力格差に挑む だれが学力を獲得するのか」『教育社会学研究』第80集, pp.23-39.
- ・ Hamano, T., 2010, "The Impact of Early Childhood Education on Overcoming Disparities in Academic Performance", *Proceedings: Science of Human Development for Restructuring the "Gap Widening Society"*, 09, pp.9-16.
- ・ ジェームズ・J・ヘックマン, 2015 『幼児教育の経済学』東洋経済新報社.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

前馬優策、学力格差問題のまわりで、生産と技術、査読無、Vol.70, No.1、2018、pp.80-82.

〔学会発表〕(計 1 件)

前馬優策、社会経済文化的背景に起因する学力格差からみた社会に開かれた教育課程、日本学習社会学会研究会「社会に開かれた教育課程と教育・学力格差」、2017.

〔図書〕(計 1 件)

前馬優策、晃洋書房、伊藤良高・富江英俊(編著)、教育の理念と思想のフロンティア、2017、pp.88-94.

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：

国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

前馬 優策 (MAEBA, Yusaku)

大阪大学・大学院人間科学研究科・講師

研究者番号：00632738

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()